

F・W・A・フレーベルの教え子・関係者によるフレーベル教育活動の評価
— 書簡集『フレーベル賛歌—子どもと人間の友あての女性たちの書簡』に焦点化して—

小笠原道雄¹

A Study on the Evaluation of Fröbel's educational Activities
by its Pupils and the Persons

— Focusing on Fröbel's Collection of Letters: "Mein lieber Herr Fröbel!" —

Michio OGASAWARA¹

Abstract: The purpose of this study is to make on the evaluation of Fröbel's educational activities by its pupils and the persons, especially, on Fröbel's Collection of Letters: "Mein lieber Herr Fröbel!" achieved by reading material.

As published material use to the following writer's properties materials:

1. (Japanese) Tsugio IWASAKI (ed.); FUREHBERUSANKA (Fröbel=Hymn), FUREHBERUKAN, 1991.
2. (Deutsch) Helmut KOENIG (Hrsg.); "Mein lieber Herr Fröbel! – Briefe von Frauen u. Jungfrauen an den Kinder – und Menschenfreude", Volk und Wissen, 1990.

Key words: F・W・A・Fröbel, evaluation, kindergarten, Fröbel's Collection of Letters

課題と目的

本研究はフリードリヒ・フレーベル（1782-1852）の保姆養成の思想・制度・カリキュラムの全体的な評価を課題としながらも、本稿では特にフレーベルの教え子・支援関係者によるフレーベルの幼稚園を中心とするその教育活動に対する『評価』に焦点化し論究を図る。

1. 課題の前提

フレーベルの保姆養成の思想・施設（制度）・カリキュラムについて

1) フリードリヒ・フレーベルの晩年の教育活動は、1840年、世界で最初に創設した「幼稚園」（キンダーガルテン）に関わる子どもの保育に挺身する保姆の養成であった。その端緒は、フレーベルの中期（1831-36）の重要で中核的な教育活動である、スイス・ブルクドルフでの孤児院（初等学校の生徒と就学前の児童を含む）の指導であった。この孤児院での経験を基に、

1837年ドイツ帰還後、フレーベルは幼稚園で利用する教具の考案と共に、児童指導者の養成施設、コースの開設、保姆養成所を矢継ぎ早に開設し実践する。その社会的背景としては、1840年代以降、ドイツでは市民層出身の女性たちの自立した社会進出の職業として保姆の道が選ばれたからである。無論、フレーベルの保姆養成の思想の根幹には、家庭と同質の子どもを養育する「場」としての養成施設が思考されていたのである。

2) この時期、フレーベルの保姆養成の施設（制度）としては、以下の3カ所の地域で開設された。

(1) バード・ブランケン近郊の〈児童指導者のための養成施設〉

①1840年、バード・ブランケンブルクに保姆養成所（児童指導者コース）を開設。

②1844-45年、「カイルハウ保姆養成」を開設。

③1848年、「ルドールシュタット養成施設」を開設。

④1849年、「リーベンシュタイン養護施設」を開設。

1 広島大学名誉教授現附属幼年教育研究施設研究員、ヴラウンシュバイク工科大学哲学博士 Dr.phil.

- (2)1848年、「ドレスデン保姆養成施設」を開設。
(3)1849-50年、「ハンブルク幼稚園教員養成コース」を開設。

3) フレーベルの保姆養成に関する具体的なカリキュラムが提示されたのは、1827年から29年にかけての「国民教育施設 (Volkserziehungsanstalt)」並びにその付設の「養育と発達の施設 (Pflege- und Entwicklungsanstalt)」の設立計画として構想された「ヘルバ・プラン (Helbaer Project)」, 正式には、「マイニンゲン近郊のヘルバの国民教育施設及びそれに付設する、3歳から6歳の孤児のための世話と発達の施設に関する広告」を端緒とする。そのオリジナル資料を正確に解読すると、ザクセン州マイニンゲンの最高指導者であるヒルトブルクハウゼンのベルンハルト公爵 (Herzog Bernhard von Sachsen=Meinigen=Hildburghausen) 側とフレーベルとの錯綜した交渉過程が判明する。最終的には、この希望に満ちたフレーベルの提言もフレーベルに対する公爵側当局の思惑から挫折する。フレーベルはスイス人音楽家、シュナイダー・フォン・ヴァルテンゼー (Schnyder von Wartensee (1786-1868) の助言と支援をえて1831年5月、「再び新しい生活のための新しい生活のなかに立つために」という覚悟を胸に、新天地スイスに赴くのである。スイス時代(1831-36)はフレーベルの人生にとって「移行・転換・前進の時期」(R. ボルト) であった。1833年10月にはフレーベルはベルン州政府の求めに応じ、「カントン・ベルンの貧民学校の計画」を当局に提出しているし、1835年5月にはペスタロッチーが活躍した同じ場所で、ブルクドルフ孤児院の校長に就任。かたわら、6月から9月まで60名の初等学校教師対象の3ヶ月の補習コースも開設しているのである。このようにフレーベルはスイス時代に貧民教育施設、孤児院、基礎学校を開設し、最終的には、1836年5月24日、孤児院を去る直前、『ブルクドルフ孤児院内の初等教育校案』を作り上げる。ここでは4-6歳、6-8歳、8-10歳、10-12歳の4段階の教育課程が組み込まれている。このなかで4歳から6歳までを一つの段階としているところにフレーベルの幼児期と学齢期の繋がりへの重視を読み取ることができる。これは重要な「接続学校(級)」の構想であった。この構想は、現在ドイツの学校制度のなかで『キンダーシューレ (Kinderschule)』として実現され重要な役割を果たしている。このようにフ

レーベルは新たに貧民教育施設、孤児院、基礎学校を開設するのである。これらのフレーベルの努力は1840年6月28日、『一般ドイツ幼稚園』設立に結実するのである。

2. 本論 (研究方法を含む)

フレーベルの教え子・支援関係者によるフレーベル評価一書簡集『フレーベル賛歌—子どもと人間の友あての女性たちの書簡』の考察—

1) 本論では論者自身も翻訳に参加した以下の書簡集、すなわち、監修・訳者代表 岩崎次男『フレーベル賛歌—子どもと人間の友あての女性たちの書簡』幼稚園創設150周年記念出版、1991年11月、フレーベル館より刊行された『書簡』を活用する。[書簡の形態: 菊判 美装丁本 写真・図版の解説、関係略地図 略年表 訳者一覧 (17名) を付す] ([] 鍵括弧内は論者の補足。以下、同様)

本書は旧東ドイツ崩壊直前の1990年、ヘルムート・ケーニヒ編纂『親愛なるフレーベル様! —子どもと人間の友あての女性たちの書簡—』(Helmut König (hrs.) “Mein lieber Herr Fröbel! -Briefe von Frauen u. Jungfrauen an den Kinder- und Menschenfreund), の書名で、Volk und Wissen から刊行された。[書簡の形態: 規格外128cm × 195cm 美装丁本]

ただ遺憾なことに、本書簡集はドイツ語版も日本語版も共に全く読者を獲得することができなかった。1991年5月、第1回日・独フレーベル会議がバート・ブランケンブルクのフレーベル館で開催された折、館長のロックシュタイ女史が館の屋根裏に200冊程度山積みされた『書簡集』を嘆きながら、論者に一冊贈呈して頂いたことを想起する。また、日本語版の版元フレーベル館の責任者からは幼稚園創設150周年記念出版として当時の最高の印刷技術を駆使して美装丁本を刊行したが全く売れなかった状況を伺った。

2) だが邦訳本の監修・訳者代表の岩崎次男は、「訳者あとがき」において、いまだ完全なフレーベル全集が存在しない状況下で、本書簡が「フレーベル研究上、そして幼児教育史上の価値ははかりしれないものがあると思われる。」と記し、本書の刊行の経緯やその特色を丁寧に説明している。なかでも岩崎が注目するのは、「フレーベルと同時代の彼の教え子や支援者たち

が、彼の幼稚園をどう見ていたかを知ることができる」ことである。まさに卓見というべきである。今日用語でいえばまさしく、フレーベル幼稚園に対する評価、それも「関係者からのフレーベル幼稚園に対する評価」であり、同時にフレーベル自身に対するその活動の評価なのである。

3) 内容の分析

フレーベルは、1840年バート・ブランケンブルクにおける最初の幼稚園の設立、さらには最初の幼稚園教員（すべて幼稚園女教員）養成所の設立によって、発達の最初期（乳幼児期）からの子どもたちの全面的かつ調和的な教育に関する理論の探求やその実践にかかわることができた。なお今日、当時開設の25のフレーベル幼稚園が確認されている。

このような時代背景の中で、本『書簡』は、最初の幼稚園の設立や幼稚園教員養成所の設立から、1852年6月21日、フリードリヒ・フレーベルが亡くなるまでの12年間にわたる資料、すなわちベルリンの旧ドイツ民主共和国教育科学アカデミー文庫収納資料（現在はベルリン陶冶史研究図書館（略称：BBF）に収納されている）とバート・ブランケンブルクのフリードリヒ・フレーベル博物館の遺品の中にある139通の書簡が選択され、1989年、旧東ドイツを代表する就学前教育の研究者 H. ケーニヒ（Helmut König）によって編纂され、1990年に刊行されたものである。ただし訳者あとがきによれば、刊行後、本書簡に集録されるべき12通の手紙（書簡）が落ちていたことが編集実務者の調査で判明したが、本書簡にはそれらは集録されていない。

この H. ケーニヒによって選択された139通の『書簡』の書き手の多くは、邦訳書の監修・訳者代表である岩崎次男によれば「フレーベルによって幼稚園教員として養成された者たち…(略)と(略)…若干の女性解放運動にたずさわったりしている女性の書き手で…(略)…フレーベルを敬愛した者たち」で、いわば市井の人々なのである。タイトルは〈教え子たちの書簡—1840から1852年まで—〉と記述されている。

以下、邦訳本に従い、139通の『書簡』の中からこの期のフレーベルの幼稚園等の諸活動に直接に関与した人物や機関等を通じてフレーベルの人物評価に関する特徴的と思われる人物を論者の設定した〈規準〉で—具体的には、養成機関の場所、時期、地位、役割等が確定できるこ

と、他の研究書で取り扱われたことのないごく普通の、しかしフレーベルを敬愛し、幼稚園活動に挺身している幼稚園教師を選択し紹介する。

最初に、書き手の氏名と手紙の発信地、日付（地）を記し、その内容の特徴を要約的に説明する。

(1) 書簡の考察

1. ルイーゼ・マーレツォル (Louise Marezoll)

イエナ1840年5月30日付

L. マーレツォルはまずイエナ、続いて1843年以來、ライプツィヒに滞在。彼女によって編集された『婦人新聞—婦人のためのまた婦人による娯楽新聞—』、1839年12月の第142号及び第143号において、「フリードリヒ・フレーベルによってルドールシュタットのそばのブランケンブルクに設立された幼児期及び青少年期の作業所衝動を育てるための施設に関する若干の所見」と題する論説をもって、ドイツ幼稚園設立の準備工作をした。つまり、彼女はフレーベル幼稚園の実質的な設立準備者であった。

手紙の内容は、フレーベルが〈ゲーテンベルク印刷術発明400年祭〉を記念して幼稚園の創設のための資金として〈株券〉の発行を考えるが、〈株式〉の署名用紙の配布等に関するフレーベルの楽観的な〈方策〉に対して、かなり厳しい見方をして彼女の〈方策〉を提言している。文末には「この事業は、あまりにも大きすぎるぐらいです。」と結ばれている。

事実、理念を先行させるフレーベルの〈方策〉は厳しい現実と直面する。最終的に1843年6月28日でも、たった155人が〈株券〉購入の署名をしたにすぎず、その内、現金での入金は37名というものであった。

なお、ドイツ語版、邦訳版のいずれにも製本の見返り頁に2葉の株券が印刷されている。上段の一つは、1841年9月26日、フレーベルの生徒であり友人でもあったアドルフ・フランケンベルクが書いた株券。ゲーテンベルクに対する「記念碑」として幼稚園の構想を示している。下段は、1841年11月13日、カイルハウの幼稚園について書かれた株券でいずれもそのオリジナルのコピーである。

2. ミッデンドルフ, アルヴィーナ

(Middendorf, Allwina (1827-?))

ドレスデン5月26日付

ミッデンドルフ, アルヴィーナはフレーベル

の協力者であり、かつ終生信頼のおける友人であったミッデンドルフ (Middendorf, Wilhelm 1793-1853) の娘である。カイルハウ及びバート・ブランケンブルクで1843年及び1847/48年の養成講座に参加。フレーベルによって養成された最初の幼稚園教員のひとりでドレスデンのアドルフ・フランケンベルクの幼稚園で教員、1849年5月以降、ハンブルクのドーリス・リュートケンスの学園で活動した。

手紙の内容は、ドレスデンのフランケンベルク幼稚園の日常生活が記述されている。40余名の幼稚園児が在籍し、年長はフランケンベルク、年中はルイーゼ、そして年少はアルヴィーナの三名が各グループを受け持って、児童に体操の練習をさせる。年長組の男子はフランケンベルクが担当して鉄棒あるいは吊り棒を、女子は平行棒の練習や跳馬をする。小さい子は平均台の上をまっすぐに通り抜けることを学ぶか、かけっこをする等々。

10時半に全員が部屋に入り、朝の時間を過ごす。最初の朝の祈り、一緒に賛美歌を合唱し、次に子どもたちは、歌いたいと思う歌をフレーベル編著の家庭育児書『母の歌と愛撫の歌』(1844) から選択して歌いながら遊びを手で表現する。なかでも人気のあるのは、「親指でひとつ、人差し指でふたつ」などして遊ぶこと。

その後、それぞれのグループにわかれ教室に入り、年中組は発音の練習や年少組は積み木をしたりして遊ぶ。

月曜日と木曜日の11時に体操の先生ローゼ氏がやって来て、子どもたちは皆体操をする。最初に、足、脚を使つての運動、それから全身を使つての平行棒、鉄棒と吊り棒での体操。午後、子どもたちは2時前に庭に出て3時迄、保姆共々運動遊びをする。この遊びは子どもたちからの提案によるものである。3時には年長組は読書か図画か、計算もある。年中・年少組は積み木や玉転がしで遊ぶ。

月曜日と木曜日の3時に、大学生のブラウン氏が来園、年長組に一種の宗教の授業を行う。これは学務局から求められているもので、子どもは6歳を超えているからである。4時、子どもたちがわれわれのもと〔園〕から去る。

われわれは、このアルヴィーナの手紙から当時のフレーベル式幼稚園の日常を知ることができる。特徴として、1. 子どもの発達にしたがって年長／年中／年少に組み分けされていること。2. 最初には、園全体で子どもが集まり作

業を行い、その後に、グループにわかれ、園児の発達に応じた作業(遊び等)が遂行されること。3. 遊び等においても子どもの自主性が尊重されていること。4. 身体を鍛える点に配慮されていること。5. 年長組を中心に宗教の時間が設けられていること。その際、4.と5.に関しては外部からの専門家を招聘していること、などである。

なお、本書簡の冒頭が、〈親愛なる代父様〉と呼びかけていることから、フレーベルがアルヴィーナの名付け親であることが判明する。

3. クリュウガー、アマーリエ (Krüger, Amalie)

クエッツ [ハレ近郊] 1849.6.16.付

ハレ出身。L・ヒルンデハーゲンのいとこ。カイルハウでの1847年の養成講座及びドレスデンでの1848/49年の養成講座、クエッツでの1847年の子ども祭り、並びにルードルシュタットでの1848年の教育家集会に参加。1848年、ハレ及びゴータで幼稚園教員。1849年、ハンブルクのW・バイトのもとで、1849年、チューリヒのカール・フレーベルのもとで、またハンブルクの彼の女子大学において、妻のヨハンナ、旧姓キュストナーと友情を結ぶ。カール(フレーベルの甥)とFr. フレーベルを和解させようとした。

本書簡は1849年6月16日付けのチーリヒからの手紙である。クリューガーはすでに1949年8月24日、フレーベルに返信を認めていたが、上記の略歴からも明らかなように、彼女はカイルハウでの養成講座、ドレスデンでの養成講座、1848年、ルードルシュタットの教育家集会に参加し、さらにハレ、ゴータでの幼稚園教員を経て、1849年のW・バイトのもとで、さらにはチューリヒ滞在のカール・フレーベルのもとでの生活を経て、ハンブルクの女子大学においてW・バイトの妻ヨハンナと友情を結ぶことになる。このように彼女は短期間に転々と場所を変えることによって、各地における当時のフレーベル幼稚園の活動をめぐる人間模様やその状況、そして世間での評判等々を見聞、体得することになる。

ここで論者が注目するのはハンブルクの動向で、ハンブルクにおける「市民幼稚園 (Bürgerkindergarten)」の創設の状況である。何故ならば、晩年のフレーベルは冬の期間にはしばしば、カイルハウから橇を利用してハンブルクを訪問しているからである。

資料的には、重要な F. W. ランゲ (Lange) 編『フリードリヒ・フレーベル教育学全集』(Friedrich Fröbel's gesammelte pädagogischen Schriften) 第1部第1巻 (Abt.1, Bd.1) の「序」で、同僚でありしかも終生最も信頼のおける友であった ヴィルヘルム・ミッデンドルフ (Middendorf, W., 1793-1853)* に言及しながら、ハンブルクにおけるフレーベルの様子を記述している。[*注記：ミッデンドルフに関連して本論2のアルビーナの項目も参照のこと。]

しかしながら、ハンブルクの市民幼稚園に関しては、わが国では、岩崎次男の編訳書、フレーベル著岩崎訳『幼児教育論』(世界教育学選集68)、明治図書、(1972) に「ハンブルクの最初の市民幼稚園の解説に対する [フレーベルの] 挨拶」と「ハンブルクの最初の市民幼稚園の定款」が、ランゲ編、「フリードリヒ・フレーベルの週刊誌、人間陶冶のすべての友のための統一誌」第12号と第7号を底本として紹介されているだけである。(注記：[] 内は論者挿入)

さらに論者が関心を抱くことは、〈フレーベル集団〉(Fröbelischer Kreis) を形成する最初期に見られる甥カール・フレーベルとフレーベルの反目しながらの関係である。この両者の反目を和解させようと腐心するクリューガーの心遣いが本書簡にはみられる。フレーベルは一体何にいらだっていたのであろうか？ 論者には〈フレーベル集団〉の頭目としての自負がフレーベルにはあったのではないかと推察する。

なお、このハンブルクの幼稚園の子どもの数が「わずか12名で、男の子が8人、女の子が4人」であり、幼稚園の時間が、土曜日と水曜日以外は、毎日5時間であることが判明する。しかしアマリエは「一人の子がこちらで、別の子はあちらでと楽しんでいる様子を見つけることは、私にはいつまでも尽きない喜びです。」と感嘆しているのである。

ここには、少人数でしかも子どもの自性主を重んじるフレーベル幼稚園の本質が伺われる。

4. ヘンリエッテ・ダーレーンカンブ

(Henriette · Dahlenkamp) ハーゲン出身、ドレスデンで1848-49年の養成コース参加、1848-51年ライプツィヒ幼稚園教師、2度バーデン・バーデンの J. D. ゲオルゲンズのもとで幼稚園教師を務める。

ライプツィヒ1849年8月26日付ここでは直接フレーベルの養成講座には参加

せずにフレーベルの精神に共鳴し、フレーベル主義幼稚園の忠実な幼稚園教師になろうと苦悩する女性教師の書簡を紹介する。

「私の大切な、親愛なるフレーベル先生！」の呼びかけで始まる本書簡は、自分が幼稚園を開設してから、多くの困難に直面して、その誤謬を正すために〈真摯な戦い〉が繰り返されたことが記されている(岩崎監訳, P.146)。そこからヘンリエッテは「あなたの真の弟子になるためには、あなたの方法を呑み込み、自己の全生活と活動をその方法に応じて変え、規則づけることを探し求めなければならないということ」を、私は見出ししましたし、日々いっそういっそう認めています。」とフレーベル精神に殉ずるその覚悟を表明している。そのことは自分だけではなく、子どもたちに「最善の刺激」となり、子どもたちを「生命づけたり」することになる、とまで述べている。(岩崎次男監訳, p.146-179) その上で、人間の最も高貴な精神的尊厳を念頭におくフレーベルの教説の高貴な目標は「私を感激させ、心臓を最奥まで暖めてくれました。」と感嘆している。

われわれはこのヘンリエッテのことばから、彼女がフレーベルの理念やフレーベル主義幼稚園に対する揺るぎない確信を抱いていることを感じることができる。

他方、論者は、このヘンリエッテのフレーベルの、あるいはフレーベル主義幼稚園に対する感嘆や確信が、彼女自身の個人的資質なのか、あるいは当時の幼稚園に対する時代状況の一つであったのか？ フレーベル「神話」の一つの源泉なのか？とも思考する。以下、長文にわたるヘンリエッテの手紙からライプツィヒのフレーベル幼稚園活動の具体的な事例を紹介する。

ライプツィヒ幼稚園での具体的活動：

1. 歌唱：教員たちを驚かすほどの子どもたちの歌—運動遊びの歌、ボール遊び、しかし『愛撫の歌』は少ない。中でも、コール先生作曲の『母の歌と愛撫の歌』(1844)は子どもたちにとっては「あまりに難しい」ので他の作品、運動遊びをするとき「別のやり方で編成」する。R. コール作曲の『母の歌と愛撫の歌』は多くの教員から「高音で難しい」との評判であった。ただ一人美声の持ち主で本『書簡』にも二度登場するゼーレ、イーダ (Seele, Ida—カイルハウとブランケンブルクでの1843年の養成講座に参加。バート・ブランケンブルクで最初に養成された幼稚園教師。フレーベルの紹介で1844年以降幼

稚園教師。幼稚園禁止令後、フレーベルとの交通は途絶える一)は、R. コール作曲の『母の歌と愛撫の歌』は(素晴らしい)と評価している。その様子は、1848年8月13日付けのダルムシュタットからの手紙で幼稚園での遊戯指導の中に見ることができる。(岩崎編訳、Pp.89-90)

なお、ダルムシュタットから1848年8月11日付けで発信された手紙の追伸でアルヴィーナ・ミッテンドルフに便りをしたいが「恐れ入りますが彼女の住所を教えてください」とフレーベルに依頼している。この文面からは、アルビーナ・ミッテンドルフ*に対する信頼の程が伺われる。[*アルビーナ・ミッテンドルフに関しては本論2. 参照のこと]なお、本『書簡』の全体中、最も長文なものがこのヘンリエッテ・ダーレンキャンプの手紙である。

ここで論者が特に強調したい事柄は、ヘンリエッテ・ダーレンキャンプがライプツィヒやドレスデンでフレーベル主義幼稚園の教師を務めていたという点である。実は、今日全ドイツで唯一、フレーベル幼稚園教師養成の〈ディプロマ〉(diplom = 卒業証書、資格免状)を交付している機関がこのドレスデン・フレーベル幼稚園教師養成所なのである。ドイツ再統一前の旧東ドイツ時代もこの養成所は東ドイツの中心的役割を果たしていたし、統一後はさらに全ドイツのフレーベル式幼稚園教師養成のモデルとなり今日、ドイツ全土を牽引しているのである。

5. ハンブルク・ドイツ婦人協会

日付の無い書簡

本書簡は、唯一、「団体」からの『書簡』として掲載されているものである。本書簡ではハンブルクでフレーベルに対して生起してくる諸義務を果たすために委員会が設置されたことがフレーベルに報告されている。17名の委員会全員の署名がなされ、そのオリジナルが166頁に印刷されている。

文面からは、協会が「フリードリヒ・フレーベルの重要事(項)」を審議し解決するために20名の委員で委員会を構成し、「フレーベルに対する責任」を代理しておこなうために、事務局を設置するというもので、この案件が公式に、事前にフレーベルに知らされていなかった点を「お詫び申し上げる」というものである。

この内容からは、フレーベルがハンブルクにおける「市民幼稚園」に関心をもって

たかということ。そしてフレーベルの関与に対してハンブルク・ドイツ婦人協会が特に委員会を設置して「あなた[論者注、フレーベル]の重要事を促進することに基礎を据る」配慮を示していることである。ここにはハンブルク・ドイツ婦人協会の自負をわれわれは感じることができる。

われわれは、当時のハンブルクが「ハンザ同盟の盟主」としてその地位を確保し、「自治」の精神に貫かれていた点を認識することが必要である。

6. ミンナ・シェルホーン (Schellhorn, Minna)

ワイマール1852.6.1.付

本『書簡』中で日付が確認される最終の手紙である。

ミンナはワイマール出身で、商人の娘である。1851年、マリーエンタールの養成講座に参加し、1851年以降、ワイマールの幼稚園教員を務める。

書簡の内容は、フレーベルから受け取った手紙に対する熱烈な『感謝』の返信である。具体的には、フレーベルから依頼され、フレーベルが1852年6月9日の新妻ルイーゼへ贈る「服装の色」=青色に関する案件である。敬愛するフレーベル様!で始まる手紙は「あなたのあなたに心からの忠実な感謝に満ちた生徒」ミンナ・シェルホーンと擲筆されている。

リーベンシュタインでの養成講座に参加し、ルイーゼとも親交のあったこのミンナの手紙は、われわれに最晩年のフレーベルの安らぎに満ち、安定した精神的状態を彷彿とさせてくれる。

周知のように、1852年6月21日6時30分頃、フレーベルはマリーエンタールで誠実な妻ルイーゼ、ミッテンドルフ、愛情溢れる使用人そしてルイーゼと共に最晩年のフレーベルの生活を支えたエレオノーレ・ヘルバルトなどに囲まれて70歳の生涯を閉じるのである。

このフレーベルの最晩年を感動的に伝える貴重な文献が、エレオノーレ・ヘルバルト著『フレーベルの晩年—死と埋葬』(1902)である。

3. まとめ

われわれは、フレーベルの幼稚園やフレーベルの教育活動に対する評価を、旧東ドイツ崩壊直前の1991年、H. ケーニヒによって選択された139通の手紙の編纂書『親愛なるフレーベル様!—子ども=と人間の友あての女性たちの

書簡一』によって、具体的にその関係者や教え子の手紙を通じておこなった。すでに言及したように、この邦訳書が監修・訳者代表の岩崎次男によって、幼稚園創設150周年記念出版として、1991年11月30日の日付で原著に詳細な説明を付してフレーベル館から刊行された。従って、論者は邦訳本を底本としながら、同時に、原著の閲読をはかりながらフレーベルの教育活動の「評価」を行った。この手法によるフレーベルの「評価」は、わが国での端緒となるものである。

だが根本的な問題が残る。139通の手紙から論者の〈規準〉で僅か6通だけを選択しての考察で、はたして正しい「評価」ができるのか、ということである。

以下、フレーベル「評価」といった観点からその課題を結語として論述する。

4. 結語

フレーベル「評価」の課題—結びにかえて

われわれは今日、いくつかの『F・W・A・フレーベル』に関する研究書を手にすることができる。なかでも、現在、世界のフレーベル研究を牽引する同僚のH. ハイランド (Helmut Heiland, 1937-) によるオリジナル資料に基づく精緻な一連の研究書では「真正なフレーベル」(Der authentische Fröbel) 像をわれわれに提示し、これらの資料から文献(学)的にはフレーベル「評価」がなされている。

以下、年代順にその書名をあげる。

1. 『フレーベルと後世—フリードリヒ・フレーベルの影響作用史研究』, (1982).
2. 『フレーベル研究』, (1983).
3. 『フリードリヒ・フレーベルの教育学—1969-1989年期間のフレーベル研究論稿—』, (1989).
4. 『フレーベル研究論稿—フリードリヒ・フレーベルの1820年-1990年間の一次資料並びに二次資料に関する文献目録』, (1991).
5. 『フレーベル運動とフレーベル研究—19世紀から20世紀にかけてのフレーベル運動の重要な人物, バルタ・フォン・マーレンホルツ=ビューロー, フリードリヒ・ヴィヒャルト・ランゲ, エレオノーレ・ヘールヴァルト, ヨハネス・プリューファー—』, (1992).
6. 『フリードリヒ・フレーベルの遊戯教育学』, (1998).
7. 『フレーベル研究に関する新論稿』, (2017)である。これらの書籍はいずれも刊行時に著者

H. ハイランドからサイン入りで論者が贈呈を受けたものである。なかでも、上記5. では、19・20世紀、世界のフレーベル運動に重要な役割を果たした人物としてマーレンホルツ=ビューロー (1810-93), ランゲ, F. W. (1826-84), ヘールヴァルト, エレオノーレ (1835-1911), ヨハネス, プリューファー, J. (1882-1947) が取り上げられて、その「評価」がなされているのである。これらの人物については、本『書簡集』でも度々登場し、フレーベルの教育活動に言及している。その他、H. ハイランドには、チューリンゲン州立博物館から刊行される論文集「〈真正な〉フレーベル」, 「フレーベルの〈日記〉」, 所収: 『真正なフレーベル』(2004)において、さらには「フレーベルの幼稚園教育学と女性教育者の職業教育」, 所収: 『幼稚園の始まり』(1999)において、さらには最近刊書『新しいフレーベル論文集』(2017)においては、フレーベル研究に影響をおよぼした重要な人物を時代別に区分し、とりわけ3名の重要な人物、すなわち、フリッツ・ハルプター (Halfter, F., (1878-1950)), チュービンゲン大学の恩師であるオットー・フリードリヒ・ボルノウ (Bollnow, O. F., (1903-1991)), そして、エリカ・ホフマン女史 (Hoffmann, E., (1902-1995)) にまで言及し、その「評価」をしている。

従って論者は、本考察ではこのようなH. ハイランドの精緻な論究で取り上げられ、かつ『書簡集』に度々登場する、著名な人物の「手紙」を取り上げることは避け、生前のフレーベルの教育活動の中核的な「保姆養成」に関する「教え子・支援者・関係者」等のフレーベルを尊愛する「普通の人」, わが国のことばでいえば「市井の人」の「生」の声を、フレーベルとの『書簡』のやりとりにおいて考察し、「検証」した。

だが研究対象の人物に関してこのような〈規準〉を設定することによって逆に欠落してしまう重要な人物も存在する。それらを補完するため以下の三冊の研究書を挙げておく。

1. D. ホルターシンケン (Holtershinken) 著『幼稚園のための遊び, 歌, そして祈りから—ヴィルヘルム・ミッデンドルフ—忘れられた教育者』, projektverlag, 2010.
2. H. シュチュビヒ (Stübig) 著『フリードリヒ・ヴィルヘルム・アウグスト・フレーベル—〈功績あるドイツ人教育者〉の伝記と影響作用史論稿』, 2010. projektverl.
3. H. プロール (Proll) 著『精神科学的教育

学のフレーベル受容（ノール、ペータゼン、シュ
プランガー、ホフマン）』, Ulrich Schallwig
Verlag, Bochum, 1988. [注記：本著はデュース
ブルク総合大学の学校史研究叢書4として刊行
されたものである]

しかしながらこれらフレーベル研究者による
緻密な専門書でのフレーベル記述・評価には、
研究家の視座、研究者のおかれた時代状況等
による『認識関心』によって左右され、必ずしも
客観性をもつことにはならない。従って、われ
われにはフレーベル幼稚園の各々の「現場」で
の実態（事実）をそれぞれ結びつける、つまり
「点」としての一つの幼稚園をそれぞれ結びつ
けて「面」に展開する想像力が要求されるので
ある。

最後に本論稿がわが国のフレーベル研究にお
ける『書簡』を資料として解説し、具体的なフ
レーベルの教育活動に対する「評価」としては
じめての試みである点を再度強調して擧筆する。

引用・参考文献

(2. 本論での引用・参考文献は文中に挿入し
たので、本項では省略する)

小笠原道雄 (2015) 「未刊行資料の解説による
フレーベル幼児教育思想の形成と展開ース
イスにおけるフレーベルの教育活動(1831-
36)を焦点化してー」, 所収：日本ペスタ
ロッチャー・フレーベル学会紀要『人間教育
の探求』, 第 27 号, pp.1-25.

小笠原道雄 (2018) 「未刊行資料の解説による
フレーベルの『ヘルバ・プラン』の研究」,
所収：『広島文化学園大学学芸学部紀要』
第 8 号, pp.5-15.

R. ボルト/W. アイヒラー著小笠原道雄訳 (2006)

『フレーベルー生涯と活動』, 玉川大学出版
部, p.94.

『フレーベル全集』第 3 卷 (1997), 玉川大学出
版部, 第二章, 第四章, 第五章, 第六章,
第七章参照。なお本著は Wichard Lange
(Hrsg.), Fridrich Fröbel's gesammelte
Schriften, Abt.1, Bd.1, 1862. の翻訳である。

岩崎次男 (1999) 『フレーベル教育学の研究』,
玉川大学出版部。

小笠原道雄 (1994) 『フレーベルとその時代』,
玉川大学出版部。

Ed. シュプランガー著小笠原道雄・鳥光美緒子
訳 (1983), 『フレーベルの思想界より』,
玉川大学出版部。

H. ハイラント著小笠原道雄・藤川信夫訳 (1991),
『フレーベル入門』, 玉川大学出版部。

E. ヘルヴァルト編小笠原道雄・野平慎二訳
(2014), 『フレーベルの晩年ー死と埋葬ー』,
東信堂。

小笠原道雄 (2014) 「思想研究の鳥瞰図ーフ
レーベルの未刊行資料の調査・収集・解説から」,
所収：教育哲学会編『教育哲学研究』第
110 号, pp.70-99.

小笠原道雄 (2017) 「明治期 (1868-1912) 日
本におけるフレーベル主義幼稚園受容の特
徴ーフレーベル主義幼稚園導入の先駆者
を中心としてー」 (2017年10月19日, ベ
ルリン・フンボルト大学並びに森鷗外
記念財団共催；テーマ「<子供の天国ー
西洋人の目から見た明治日本の子供生活>」
における冬学期開始講義招待講演), 所
収：日本ペスタロッチャー・フレーベル
学会紀要『人間教育の探求』第 29 号,
pp.1-16.